
異世界への旅立ち 上下巻

ココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への旅立ち 上下巻

【Nコード】

N1496Z

【作者名】

ココア

【あらすじ】

中学一年の2月12日、空閑^{くがはると}春斗と言う少年が奇妙な本により、異世界に飛ばされた。元の世界に戻るため、修行し、学園に入学し、ギルドに入り、本の秘密にせまる！！

異世界に飛ばされた（前書き）

何となく書いて見ました。

処女作です。

素人なので、視点の狂い、誤字、脱字があると思いますが、温かい目で見守ってください。

更新はあまり早くありません。

異世界に飛ばされた

俺の名前は『空閑 春斗』

家族は、俺と父さん、母さん、それと双子の妹『柚』の4人家族だ。俺と妹は二卵生双生児だったので顔は似ていないが、俺も妹も世間一般的にみれば顔は整っている。

妹の性格はおてんばだ。

いつも俺は妹に引つ張りまわされる。

そのせいか、俺は中学1年にしては大人びいていると言つか、さめている？

そんな俺は中1の2月12日、いつもと同じように学校に行き、授業をまじめに受ける。

そして放課後。

俺が帰り支度をしていたら、いつもつるんでいる悪友こと『藤代弘毅』が話しかけてきた。

「今日暇か？」

「特に用事はないが．．．」

「頼む！！倉庫の掃除手伝ってくれ！！！」

「お前、また何かやらかしたのか．．．」

弘毅はよくくだらないことをして教師に怒られている。今日もそのたぐいだろう。

「頼む!!!」

そのうち土下座までしてきそうな勢いだったので、めんどくさいが手伝うことにした。

「今度何かおこれよ。」

「ありがとー!!! やっぱ持つべきものは友だな。」

「調子のいいことばかり言いやがって。」

二人で倉庫に行き掃除を始めた。

しかし、倉庫の中はひどいものだった。

二人で整理するが一向に物が減らない。

俺は無数に散らばっている本の中から1冊を手を持った。

その本のタイトルの文字は見たことなかったがなぜか読めた。

「『異世界への旅立ち 上巻』」

なんとなく本のタイトルを読んだら急に本が光りだした。
そして俺は光に包まれた。

視界が回復し辺りを見回してみる。
周りは木が生い茂っている

空は青く、太陽が出ていていい天気だ。

ここはさっきまで掃除していた倉庫ではない。

「ここは．．．どこだ．．．」

遠くでは何かの鳴き声がする。

この森は薄ら寒さを感じた。

「一体何が起こった？」

本のタイトルを読んだら光に包まれたことしかわからない。

「しかたない、少し歩いてみるか。」

10分位歩いただろうか。

「この森はどこまでつづくんだ？」

もといた場所まで、引き返そうか考えていたその時！！

急に草むらが揺れ何か飛び出して来た。

黒い狼だった。

「うおお！！」

俺は横に飛び、狼を躲した。

鋭い爪が服をかすめた。

「あつぶな！！　なんで狼がいる？」

早く逃げようと辺りを見るがすでに5匹の狼に囲まれていた

「やば…」

狼たちはじりじりと近寄ってくる。
そして狼たちは一斉に襲って来た。

もうダメだ！！と思ったその時。

「アイスグレイヴ！！」

その掛け声と共に、俺の周りの地面が凍り、無数の氷の棘が出てきた。

氷の棘は5匹の狼を串刺しにした。
数秒して氷の棘は消え、そこには生き絶えた狼が転がっていた。

「今の一体…」

放心状態でいたら、さっきの掛け声を出したと思う人が話しかけてきた。

「怪我は無いか？こんな森の中で装備もろくにしないでなにしている」

俺は放心状態から立ち直り声の主を見た。
女の人だった。

髪の色は赤く、肩にかからない長さで、顔は整っていて、目はキリッとしている。

綺麗な人だ。

「あ、ありがとうございます。助かりました。怪我は無いです。」

女の方はホツとしたような表情をし、次に少し怖い表情になった。

「多くの魔物が住んでる森の中でなにをしているんだ。腕の立つ冒険者でも、なんの装備も無しに森には入らないぞ。」

俺はなんて答えればいいのか迷った。

正直に話して信じてもらえるか微妙だ…

嘘をつくにも此処が何処だかわからないしうまくいくとは思えない。

迷った挙句正直に話すことにした。

「本のタイトルを読んで、光に包まれたと思ったら、ここに来ていました。」

「なに、お前は何処からきた？」

「日本です。」

「それは何処だ？ここにはそんな地名はない。」

「日本が…ない……なら此処は何処なんですか？」

「此処はヴァンリス王国の王都から、北に3日ほど歩いた場所にあるウィアードの森だ。」

「ヴァンリス王国？ウィアードの森？…聞いたことが…ない…」

」。

「知らないのか？それなりの大国なんだが…それと、この森は魔物のランクが高くて有名だ。Aランクの冒険者でも、ソロでは、この深さまで狩にこない。ましてやお前のような子供が一人で装備も無しにこれる場所ではない。」

俺はどうやらとんでもないところにきてしまったようだ。

ここは日本でもなく、あの人が知る限り日本と言う地名はない。

俺は違う世界に来てしまったようだ。

さてこれからどうする…

「何だかよくわからないが…いろいろあったみたいだな。この近くに私の家がある。そろそろ日も暮れる。家に来ないか？夜の森は危険だ。」

「良いんですか？」

「私は一人暮らしだからな。部屋も余ってる。それにお前に少し興味がある。」

俺は頼る人が他にいないので、ついていくことにした。

異世界に飛ばされて - 1日目

俺は女の人について行った。

15分くらい歩いたら家についた。

「ここが私の家だ。さあ、入ってくれ。遠慮することはない。」

いくつか部屋があるが、この部屋には必要最低限の物しかなかった。

「そこに座ってくれ。」

俺は言われるがままに座り、女の人はお茶を二人分もって、向かいの椅子に座った。

「まだ名前を言ってなかったな、私の名前はネル・アルベールだ。」

「俺は空閑 春斗です。」

「クガ ハルト・・・珍しい名前だな。」

「ファミリネームがクガで、ファーストネームがハルトです。」

「ハルト…私に説明してくれないか。森にいた訳を。」

俺はここに來た経緯を説明した。

ネルさんは俺の話に、時々相槌をうったり、何か考えているようなしぐさをした。

「なるほど、大体の経緯はわかった。ハルトは日本という国に住ん

でいて、見た事が無い文字が読め、本のタイトルを読んだら光に包まれた。そして気づいたら、この森の中にいて、ブラックウルフに襲われているところを私が助けた．．．と。ハルトは異世界人ということになるのか。」

「そうですね。ところで、俺を襲った黒い狼はブラックウルフって名前なんですか？」

「そうだ、ハルトの住んでいる日本といったか、そこにはいないのか？」

「魔物は俺の住んでいる日本どころか、世界中探しても一匹もいません。」

「そうなのか！安全な国なんだな。」

「俺の国では、魔物より人間のほうが怖いですよ．．．それより、以前ここに俺のように来た人はいませんか。」

俺のほかに来ている人がいれば話を聞けるのだが。ネルさんはまた少し考えていた。

「悪いが私の知るなかではないいな。」

俺のほかには来ていないのか．．．俺はだめもとで聞いてみた。

「そうですね．．．なら戻る方法はわかりますか？」

「話を聞く限り、ハルトをこの世界に飛ばした本には、何かしらの

魔法がかかっていたと考えられる。」

魔法．．．魔法．．．魔法！？

「この世界には魔法があるんですか！！」

「ブラックウルフから助けるとき私が使っただろう。」

あれは魔法だったのか．．．あの時は放心状態だったからよく覚えていなかった。でも魔法があるなら．．．

「元の世界に戻るための魔法はないんですか？」

「私は知らないし、この世界に存在するのかもわからない。」

俺は唇をかみ締めた。

元の世界には戻れない。

「まだあきらめるな。」

「気休めはいいですよ．．．」

「まだ可能性はある。憶測に過ぎないが、ハルトを飛ばした本は『異世界への旅立ち 上巻』と書いてあったのだろう？なら下巻があってもおかしくない。もしかしたらこの世界にあるかもしれない。」

俺に一筋の光が見えた。

「ほ、本当ですか？」

「憶測でしかないがな、可能性は十分にある。」

「でも、もうこっちの世界で使われていたら？」

「それは無いだろう。その本は読むことによって発動するものだ。それも選ばれたものしか読めないようになってるのだろう。選ばれたのはハルトだ。他のやつが見つけても読めないだろう。」

「なら、俺はその本を探しに行きます！！」

そういつて俺は出て行こうとした。

「まてまて！！そうあわてるな。ハルトはまだ、この世界のことはまったく知らないだろ。外に出るにはもう暗いし魔物がいて危険だ。早く本をみつけて帰りたいのは山々だが、本はもしかしたら遺跡の中にあり、遺跡には魔物やガーディアンがいるかも知れない。旅をするにしても知識と力が必要。ハルトにはまだ知識も力もない。本は使われることは無いのだから、知識と力をつけてから旅に出たほうがいい。」

「でも・・・」

「どのみち、今日はもう外には出られない。夕飯を食べてゆっくり休め。」

早く帰りたいが今の俺では本を見つけるのは無理だ・・・

「わかりました・・・」

「よし。なら遅くなってしまったが夕飯を食べよう。」

その言葉とともに俺のお腹が盛大になった。

夕飯に出た肉は、何の肉かわからなかったがうまかった。

そして、今日は色々あったせいかベットに横になったら、すぐに睡魔に襲われ眠りについた。

異世界に飛ばされて・2日目・午前

翌朝の8時、俺は目が覚めた。

いつも寝ている部屋ではなかった。

「やっぱり夢ではなかったのか・・・」

だが、元の世界に帰れる可能性はある。

俺は力をつけ、必ず帰ってみせる！！

そう意気込んでから、リビングに行った。

リビングではネルさんがすでに起きていて、朝食の準備をしていた。

「目が覚めたか。もう少しでできるから座って待っていてくれ。」

「おはようございます。すみません、ありがとうございます。」

少しして出てきたものは、パンとクリームシチュウとサラダだった。
朝食を食べながらこれからのことを話した。

「これから俺は、どうすればいいんですか？」

「ハルトはここで、力と知識をつける。」

「力は魔法、知識はこの世界での一般常識のことですか？」

「そうだ。だが魔法だけではなく剣術も覚えたほうがいいだろう。」

知識はその他に、魔物のことや遺跡、旅するのに必要な知識もだ。

「

「誰が教えてくれるんですか？」

「私しかいないだろ。」

「ネルさんがですか!？」

「今は隠居しているが、こう見えても、私はそれなりに名の知れた冒険者なのだぞ！」

「そうだったんですか。」

俺は、こんな綺麗な人が冒険者だったとは思わなかった。

「そこら辺の冒険者より腕は確かだ。だから安心しろ。だが私はそんなに甘くは無いぞ。少し休んだら早速修行を始める。」

「大丈夫です。帰るためならどんなことでも乗り越えて見せます！」

食休みをして、それから修行がはじまった。

「そう言えば、ハルトは何歳なんだ？」

「俺は13歳です。」

「なに!! 私はてつきり15歳位だと思っていた。」

「ネルさんはなんさ……………」

何歳なんですかと聞こうとしたところ、ものすごい殺気がでた。
うん、この話はしてはいけない……

俺はそう思った。

殺気もおさまったところで修行が始まった。

「魔法を使うには魔力がいる、まずはハルトの魔力を測ってみよう。」

ネルさんはそういつて奥の部屋に入り水晶玉を持ってきた。

「この水晶に両手を当ててくれ。」

俺は水晶に両手を当てた。

すると、水晶から文字が浮かび上がってきた。

「何と書いてある？」

「えっと……魔力量S、適性属性は風、雷、光……と書いてあります。」

ネルさんは驚いた顔をした。

「なに！？間違いではないな？」

「確かにそう書いてあります。」

「ハルトには魔法の才能があるようだ。」

「本当ですか!!」

「魔力量Sは相当なものだ。魔力量はG・F・E・D・C・B・A・S・SS・SSSの順に多くなる。それに適性属性が3つもある。普通の人は一つの属性しか適合しない。才能のある者でも二つだ。まれに三つ適合する者もいるが、ほとんどいない。」

「魔力量Sは魔力の量で、多いことはわかりましたけど、適正属性とはなんですか？」

「まだ説明していなかったな。魔法について説明しよう。魔法には属性魔法、治癒魔法、移転魔法、召喚魔法、付加魔法などがある。属性は火、水、風、雷、土、木、氷、光、闇だ。属性魔法は誰でも魔力があれば、全ての属性が使えるが、自分に適合した属性だけが100%能力を発揮できる。治癒、移転、召喚、付加魔法はそれにセンスがいる。できる人も要ればできない人もいる。自分の適性属性は覚えておけ。」

「わかりました。ネルさんの適性属性は何ですか？」

「あんまり適性属性は人に安易に教えるものではない。まあ、ハルトには教えてやろう。私の適性属性は水、風、氷だ。」

「ネルさんも適性属性三つ持っているじゃないですか!!」

「だから言っただろ、それなりの冒険者だと。」

やっぱりネルさんはすごい人だったのか。

「さて、魔力があることはわかった。だが、それを使いこなせなけ

れば意味は無い。まずは魔力を肌で感じてみる。私と手のひらを合わせる。」

言われたとおり、手のひらを合わせた。

「今から魔力を送る。その感覚をよく覚えておけ。いくぞ。」

俺は緊張して待ち構えた。

するとネルさんの手が光だし、俺の手を伝ってきた。

ネルさんの手のひら伝わる体温とは別の何か温かいものを感じた。これが魔力というものか・・・？

「どうだ、わかったか？」

「はい、なんとなくですけど。」

「なら自分で魔力を集めてみる。心臓の辺りを意識して、感じたものを手に集めるイメージだ。」

俺はうなずき、胸の辺りを意識したら、さっきと似たものを感じた。それを手に集めるように意識した。

すると手が、ネルさんのようにはいかなかったが、ぼんやりと光った。

「それが魔力だ。しかし、これだけでは魔法は使えない。今度は魔力を練る訓練だ。魔力を練るとは、魔力と精神エネルギーを混ぜ合わせることだ。精神エネルギーを混ぜた魔力は『マナ』という。精神エネルギーを混ぜた魔力は、体の外に出てもコントロールができる。このようにな。」

そういつてネルさんは、手のひらに青白く光る球体を創り、自由に動かして見せた。

「これがマナだ。ハルトもやってみる。さっきのように手に魔力を集め、球体としてマナを体の外に出す。ここからはイメージだ。はつきり起こしたい現象をイメージすることで、魔力に精神エネルギーを混ぜることができる。マナを球体として出すイメージをしつかりしろ。イメージによってマナの質は決まる。」

どうやら魔法はイメージが大切で、とても感覚的なようだ。

俺はさっきと同じように魔力を集め、球体となり手のひらに浮かぶように強くイメージした。

すると急に、さっきまであった魔力が手から抜け、手のひらの上に、10センチ位の白い球体が浮かんでいた。

「やった！！できた！！」

俺は球体を思うがままに動かした。
しかし2、3分で消えてしまった。

「上出来だな。これなら魔法も上達するだろう。」

「やった！！ところで、何でネルさんの球体は青白く、俺の球体は白いんですか？」

「それは、私の適性属性の中で一番相性がいいのが氷で、ハルトは光だからだ。魔力には色があるそれぞれ適性属性と関係している。
火は赤、水は青、風は黄緑、雷は黄、土は茶、氷は淡青、木は緑、光は白、闇は黒だ。」

「なるほど。俺は適性属性の風、雷、光の中で、光がさらに相性がいいのか。」

「そういうことだ。それじゃあ魔法を使ってみるか。まずは簡単な火属性の魔法『ファイヤーボール』だ。火はイメージしやすいからな。さっきの要領で、魔力を練り、手のひらにマナの球体の代わりに火球が出るようにイメージするんだ。そして『ファイヤーボール』といえ。魔法の名前の詠唱は破棄できるがイメージがしっかりできないと無理だ。多少イメージが悪くても魔法の名前を言うことで補える。」

「いよいよ魔法が使える。」

俺ははやる気持ちを抑え、うなずいた。

そして火球が出るイメージをし魔法の名前を言った。

「ファイヤーボール！」

手のひらに、さっきのマナの球体と同じ位の火球が現れた。

「初めてにしてはなかなかだな。これから色々、魔法を教えていくが、イメージをしっかりしろ。イメージが鮮明になれば、魔法の名前の詠唱は破棄できる。細かいことは追々説明する。」

俺は初めて魔法を使ったことで興奮していた。

ネルさんの最後の話はあまり入ってこなかった。

「おい！聞いているのか！！」

「は、はい！えっと・・・魔法はイメージが大事で、イメージしだ

いで名前の詠唱は破棄できる・・・ですね。」

「そうだ、暇があつたらマナの球体を速く出す練習したり、形も球体だけでなく、動物の形などにできるように練習しておけ。」

「わかりました。」

「よろしい。区切りもいいし、そろそろ昼食にしよう。」

魔力を使つたせいか、俺はとてもお腹が減っていた。

昼食の準備をしている間、午後の予定を決め、食休みの後、剣術の修行をすることになった。

異世界に飛ばされて・2日目・午後

俺は昼食をもりもり食べて、今は食休み中だ。

昼食を食べ過ぎてしまったので、少し長めにしてもらった。

「そろそろ剣術の修行を始めるぞ。」

ちょうどお腹も落ち着いたところだ。

だが、剣術の修行といっても、俺は元の世界では剣なんて握ったことの無い、素人だ。

魔法の素質はあったが、剣術は不安だ。

「俺、向こうの世界で、剣なんて握ったことないんですけど。」

「大丈夫だ。手取り足取り教えてやる。私は剣の腕も一流だ。」

ここにはネルさんしかいないので、全て任せるしかない。

「まずはハルトの身体能力を知りたい。」

ネルさんは剣を渡してきた。

「さあ、私を殺すつもりでかかって来い。」

「そんなの無理ですよ!」

「こないのならこっちからいくぞ。」

そいつってネルさんは、切りかかってきた。

俺はとっさに剣を構え、何とか攻撃をしのいだ。

「ちょ．．．ちょっと待ってくださいよ!!」

しかし、ネルさんは待ってくれなかった。

俺は腹をくくり応戦することにした。

ネルさんの攻撃をなんとか弾き、距離をとった。

深呼吸して、切りかかるべくおもいつきり踏み込んだ。

「はっ!!!!」

なんと、俺は元の世界では考えられないようなスピードで間合いをつめた。

「なに!!」

一瞬で間合いをつめられたことに、ネルさんは驚いていた。そして、激しい剣の打ち合いがはじまった。

しかし、長くは続かず、俺は剣を弾き飛ばされた。
ネルさんは剣を鞘に収めた。

「私とあれだけ打ち合うとは．．．剣術は素人だったが、身体能力、反射神経、動体視力には驚かされた。向こうの世界で何か特別なことをやっていたのか？」

「俺も驚いています．．．元の世界では特に何もしていませんでした．．．」

「そうか．．．この世界にきて身体能力、反射神経、動体視力になり向しているようだ。」

俺は自分の身体に驚いた。

まさか、こんなに身体が動き、よく見え、反応できるとは．．．

「それだけの身体能力があれば、すぐに剣術も覚えられるだろう。これからずっと剣術の修行は、私との実戦だ。ハルトには経験がない。剣の動作は実戦の中で私から見て学べ。剣術がそれなりになったら、腕試しに、この森の魔物を狩にいこう。」

俺はネルさんの言葉を聞いて顔が引きつった。

あれだけの動きをしても、5分もたなかった俺が、ネルさんとずっと実戦をするのかと思うと．．．

「さあ！はじめるぞ！！最近私も退屈していたところだ。遠慮なくかかって来い！！！」

こうしてネルさんのいじめ＋暇つぶし．．．もとい．．．剣術の修行は暗くなるまで続いた．．．

この日、俺は剣術の修行でボロボロになった。

夕食を食べ、風呂に入り、ベットに寝て、こんな生活が続くのかと思うと鬱になった．．．

色々考えていたが、剣術の修行で疲れたのですぐに眠りについた。

異世界に飛ばされて - 2年目 -

俺が異世界に飛ばされて2年と1ヶ月ちよいたち、今日は3月30日である。

この世界での暦は、元の世界と少し違い、1ヶ月30日で1 1 2月まであり1年360日だ。

俺は今年の10月で16歳になる。

元の世界なら俺は、高校に入学しているはずだ。

そんなことを思いながら俺は、朝の日課になっている、マナの球体をいろいろな動物に変えていく練習をしていた。

最初の頃は球体から立方体に変えるのも大変だったが、今では動物から他の動物へ、スムーズに変えられるようになっていた。

その後、ネルさんと魔法オンリーの実戦をやり、午後は剣術と魔法を両方使い実戦をしていた。

もうすでに俺は、ネルさんと互角の勝負ができるようになっていた。

「はあああ!!」

俺は、風を自分に纏わせ一瞬の隙を突き、ネルさんの手から剣を弾き飛ばした。

俺もネルさんも息をはずませていた。

「ハルトはこの2年間で本当に強くなった。もう私を超えたな。」

「そんなこと無いですよ。剣の技術も魔法もまだまだネルさんには及びません。」

「ふん・・・ハルトが奥の手を使えば、私なんて足元にも及ばん。」

「ネルさんだつて奥の手を隠し持っているじゃないですか・・・」

そういいながら俺は笑い、ネルさんもつられて笑った。

その夜、夕飯を食べた後、ネルさんは大事な話があるといい、俺をリビングに呼んだ。

「話って何ですか？」

「話とはハルトの今後についてだ。」

俺の今後？もしかして、本を探す旅に出ることかな。
何を言われるのか緊張しながら続きを待った。

「ハルトは今年で16歳になるんだっただな？」

「そうですね・・・」

「この世界には各国に魔法学園があるのは教えたな。」

「はい・・・」

「すでにヴァンリス王国にある、ヴァンリス魔法学園に入学願書を出し、合格通知も来ている。入学式は4月5日だ。ここからヴァンリス王国の学園都市には歩いて3日ほどかかる。明日の朝に出発すれば、5日までにヴァンリス魔法学園につけるはずだ。ハルトはヴァンリス魔法学園に入学し、そこで3年間勉強してこい。」

「えええ！！なに勝手なことしているんですか！！！！学園より本を探す旅に行かせてくださいよ！！」

「理由もちゃんとある！ヴァンリス魔法学園には世界最大の図書館がある。その図書館に目的の本があるかもしれないし、学生でなければ入れない場所もある。それに学校には、貴族で権力を持った者が必ずいる。仲間を探したりコネを作っておいたほうが、後々必ずハルトの助けになる。集団でのコミュニケーションを学ぶこともできる。」

「だけど・・・！！」

「ハルトはずっとこの森の中で暮らしてきた。一応この世界のことの説明した。だが、まだまだ教えてないことはたくさんある。いきなり冒険者になっても一人では大変だ。学園に行き人と接して、人との付き合いかななどを学んで来い。」

「わかりました・・・でも、卒業したら本を探す旅に出ます！！」

「卒業したら好きにすればよい。私からの教えはこれで最後だ。卒業すれば冒険者でも一人前としてやっていける。それに魔法学園卒業は何かと有利になったり、良い待遇をしてくれる。」

俺は話し合いの後、すぐにベットに入った。

学生生活か・・・

元の世界では中途半端になっちゃったからな。

明日出発。

ネルさんともお別れ．．．か。
2年間あっという間だったな。
そんなことを考えながら、俺は眠りについた。

異世界に飛ばされて - 魔法学園へ -

翌朝目が覚めて、朝食をとり魔法学園へ出発した。

準備はネルさんが昨日のうちに済ませておいてくれた。

「今まで、ありがとうございました。」

俺は今までのに感謝し、礼を言った。

「私も楽しかったよ。弟ができたみたいで毎日が楽しかった。たまには顔を見せにきてくれよ。」

「俺も楽しかったです。本当にありがとうございました。」

「そうだ、あまり学校などで私の名前を出さないでくれ、騒がれたくないからな・・・。」

「わかりました。」

「よし！！ハルトなら大丈夫だと思うが、気をつけろよ。」

「はい、行ってきますー！！」

「元気に、しっかり勉強しな。」

俺はネルさんと別れ、学園に向けて出発した。

森を抜けるには1日かかる。

日が暮れないうちに抜けたかったので急ぎ足になった。

1時間ほど歩いた頃10匹のブラックウルフに出会った。

昔は何もできずにやられそうになったが、今はブラックウルフと
き余裕だ。

俺は魔力を練り、風属性の魔法を使った。

「ウィンドカッター」

無数の風の刃が出現しブラックウルフ10匹を切り裂いた。

さらに何回か魔物に出会ったが難なく倒せた。

森は何とか日が暮れる前に抜けることができた。

森を抜けて30分位歩いたら、ヴァンリス王国に続く街道に出た。
今日はだいぶ日も暮れてきたので、ここで野宿することにした。

夜は特に何もなくて過ぎていった。

2日目も順調に進みヴァンリス王国に入り、3日目。

あと1時間ほどでヴァンリス王国の学園都市に着く、というところ
まで来ていた。

日暮れにはまだ時間があるので、今日は宿で寝ることができると思
っていた矢先・・・

遠くで馬車が盗賊に襲われていた。

馬車の護衛も必死に守っているが、数に差がありすぎる。

護衛が5人に対して、盗賊はぱっとみ10人以上いる。

やられるのも時間の問題だ。

俺はめんどくさいが、目の前で殺されるのを、黙って見ている訳に

もいかなないので、助けにいった。
馬車を囲む盗賊に向けて、魔法を放った。

「ウィンドチェーン!!」

風属性の魔法で、風の鎖で相手を拘束することができる。

不意打ちでいきなり風が絡み付いて、身動きが取れなくなった盗賊は混乱していた。

「い、一体なんだ!?なにが起こった。」

「これは魔法です。でも一体誰が??」

大体の盗賊は捕まえたが、3人ほど逃れた。

盗賊のリーダーらしき男と子分2人である。

盗賊のリーダーは俺に向かって。

「お前は誰だ!!よくもやってくれたな!!おい殺^やつちまえ!!」
「!!」

子分二人に命令し、二人は俺に襲い掛かってきた。

相手は剣をもっていたので、俺は鞘がついたままで剣を構えた。

そして二人の斬撃をかわし、鞘つきの剣で一人は鳩尾を突き、もう1人は後頭部を殴り気絶させた。

この一連の動作を見た、盗賊のリーダーは。

「なに!!お前なかなかやるな、ウチに雇われないか?金ははずむぜ。」

俺はさめた口調で

「俺を雇うには高いぜ。まあ、こんな弱い盗賊じゃあ入る気もしないがな……」

盗賊のリーダーは顔を真っ赤にし

「この野郎……人が下手に出れば……俺はこいつらとは一味違うぜ！お前には死んでもらう！！」

盗賊のリーダーは剣を抜き切りかかってきた。

確かに、さっきの子分より速かったが、俺にはたいしたことなかった。

俺は斬撃を全てかわし、手首、肩、首の順に鞘つきの剣を振るい、盗賊のリーダーを倒した。

盗賊を全員ロープで縛った後、すぐに立ち去ろうとしたとき、呼び止められた。

「待ってください！！」

声で女だとわかったが、振り向いてみれば、とてもかわいい人だった。

髪の色はストロベリーブロンドでボブカット、瞳は茶色だった。

彼女は頭を下げて言った。

「助けていただき、ありがとうございます。私の名前はリュカ・アルエと申します。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「俺の名前はハルト・クガ。大したことはしていない。」

「あのままでは、私たちは捕まっていました。それをハルト様が助

けてくださいました。捕まっていたら、私はどこかに売られていたかもしれません。」

「様はやめてくれ．．．本当に大したことはしていない。」

「ですがハルトさん．．．せめてお礼を。」

そういつて彼女は、身に着けている宝石をはずし渡してきた。

「こんな高価なもの！！受けとれないよ．．．」

「受け取ってください！！私の気がおさまりません。」

「わかった。ありがたく貰っておくよ．．．」

俺がそういつと彼女は顔を明るくした。

「ハルトさんはどこに向かわれているんですか。」

「俺はヴァンリス魔法学園に向かっている。」

それを聞いた彼女は目をかがやせた。

「私も魔法学園に向かっているんです、私の馬車に乗っていきませんか？」

彼女も学園の入学者らしい。

俺はお言葉に甘えて、乗せてもらうことにした。

「んじゃ、お願いしようかな。」

馬車の中で、いろいろ話した。

どこから来たとか、学園は楽しみだとか、一緒クラスになれたらうれしとか、何で俺がこんなに強いのだとか・・・

話しているうちに打ち解け、お互いをハルトとリュカと呼ぶようになった。

話していたせいか、馬車は思ったより早く着いた。

門番に合格通知を見せ、中に入った。

学園都市は中央に学園があり、その周りにいろいろなものが散らばっていた。

入学式は明後日なので明日はゆっくりできると思ったが・・・リュカが、周辺を散策しようと言ってきたので、見て回ることにした。

学園には寮があるが、まだ入れないので宿に泊まる。

リュカとは別の宿なので、明日の朝、学園の近くの広場の噴水で待ち合わせをして別れた。

異世界に飛ばされて - 学園都市 -

翌朝、ハルトは6時に起きた。

リュカとの待ち合わせは10時なので、今日はゆっくりしようと思っていたが、習慣とは恐ろしいものだ。

ネルさんとの修行中、ハルトはいつも6時に起き、マナの質を高める訓練と剣の素振りをしていた。

いつもの時間に起きてしまったハルトは、マナの訓練と剣の素振りをすることにした。

そのころ、リュカもすでに起きていた。

ハルトの泊まっている宿とは違い、広く、綺麗で高そうな宿だ。

そして、二人はゆうに寝れそうなベットの上に、今持って来ている服が所狭しと並んでいた。

真剣な表情で、今日着る服を選んでいる。

「ハルトはどんな服が好きなのかな？」

これも違う、あれも違うと、その後、リュカは2時間近く悩み続けるのであった。

2時間後、訓練を終えたハルトは、宿の風呂を借りて汗を流し、朝食を食べ、一足先に外に出ていた。

目的は、リュカとの散策では、武器屋には入らないだろうと思ったからである。

ウィアードの森から、初めて外に出てきたハルトにとって、学園都市は想像以上にでかかった。

「やばい．．．迷子になりそう．．．」

そうつぶやき、大通りを歩いて武器屋を探した。

すぐに武器屋は見つかった。

武器屋の看板は二本の剣が交差したマークで、その下にガスト武器店と書いてあった。

ハルトは本のおかげで、この世界での字の読み書き、会話ができた。このことと、身体能力の上昇は本に感謝していた。だが、この世界に飛ばされたことは別で、本には恨みと疑問がある。

ハルトは武器屋に入った。

店の中には、いかにも武器屋の店主といった風貌の男がいた。

「いらつしゃい．．．」

見た目どおりの、低く渋い声だった。

「若いな．．．魔法学園の生徒か？」

「はい、新入生です。」

「新入生か．．．ここに来たってことは、武器を見にきたんだろうけど．．．」

そういいながら、ハルトの目をじっと見つめていた。ハルトは自分が見透かされているような感覚になった。だが、すぐにその感覚はなくなり店主が言った。

「お前、かなり力を持っているな。」

ハルトは驚いたが、表情には出さなかった。

「どうしてそう思うんです？」

「わしは長年武器屋をやってる。そして冒険者を何人も見てきた。だから大体どのくらい力があるか、目を見ればわかるんだよ。それにわしが作る武器は持ち主を選ぶ。生半可な覚悟と実力じゃ使いこなせない。まあ弟子が作った武器もあるがな。」

「なるほど．．．それで俺はあなたの作った武器を扱うだけの實力はありますか？」

そう言うと、店主はもう一度、ハルトの目を見た。

「大丈夫だろう。だが、金はいくらある？わしが作った武器はそんなに安くはないぞ。」

「一番安い武器でいくらですか？」

「使う武器によって違うが、お前は剣だな。わしの作った剣なら最低銀貨50枚だな。」

「俺の全財産は金貨10枚あります。だけど、武器だけで全財産は使えません。金貨1枚で見繕ってください。」

この世界での通貨は高いほうから、白金貨、金貨、銀貨、銅貨の4種類である。

白金貨1枚⇨金貨100枚

金貨1枚⇨銀貨100枚

銀貨1枚⇨銅貨100枚

3人家族が銀貨4枚でひと月暮らせる。

店主の作る武器は最低金額でも、3人家族の約1年分の生活費だ。

「えらい持っているな!!」

「俺の師匠とでも言っときましょうか、その人が持たせてくれたんですよ。」

「お前の師匠とは誰だ？」

「それは言えません・・・師匠との約束なので。」

「そうか・・・まあ、いずれわかるだろう。それだけ力のあるお前の師匠だ、数が限られる。」

「それで剣のほうは・・・？」

「そうだったな。ちょっと待ってろ。」

そう言つて、店主は店の奥に入っていき、5本の剣を持ってきた。

「金貨1枚相当の剣だ。この中から好きなの1本選べ。」

ハルトは5本の剣を見て、一番最後の剣を見たとき頭の中を何かが

走った。

そして、その剣を取った。

「これにします。」

「なぜそれを選んだ？」

店主は真剣な表情で聞いてきた。

「なんとなくです。俺には剣の価値を見分けるだけの目はありません。だけど、見た瞬間、何かが頭をよぎったんです。」

店主は答えを聞くと、大声で笑った。

「久々に面白いやつが出てきた。その剣は、わしが今まで作った中で一番の出来だ。お前はその剣に選ばれた、代金は要らない持つてけ。」

「そんな！！貰えませんよ！！」

「いや、その剣はお前を導いた、お前を主と認めた。もうお前のものだ。他のやつには使えん。」

この剣がハルトをを導いた・・・

「本当に貰っていいんですか？」

「持つていけ。」

「ありがとうございます。」

「ところで、お前の名前はなんと言っ？」

「俺はハルト・クガといいます。」

「ハルト・クガ・・・か。わしはガスト、ガスト・レバノンだ。」

「レバノンさん」

「ガストでいいわい。」

「それではガストさん、この剣、ありがたく頂いていきます。」

「おう、剣の手入れもわしがやってやる、遠慮せずにもってこい。これは代金を貰うがな。」

ガストさんは笑いながらそう言った。

「わかってますよ。ありがとうございます。」

ハルトはそう言って店を出て行った。

ハルトは一度宿に帰り、剣を置いてきた。時間を見ると、9時をまわっていたので、待ち合わせの噴水広場まで行った。

ハルトは基本、人を待たせることはしないので、30分前に着いた。リユカはまだ来ていなかった。

15分くらい待つと、リュカが噴水広場まできた。
リュカはハルトの姿を見つけると駆け寄ってきた。

「ごめんなさい！！待った??」

ハルトは笑いながら。

「まだ時間前だろ。そんなに慌てなくても・・・」

「だって・・・こんなに早く来ているなんて思わなかったんだもの。」

リュカはうつむきながらそう言った。

「ごめんごめん。俺は人を待たせるのが嫌いなんだよ。俺の我儘だから気にしないで。それにそんなに待ってないし。」

「そんなこと言っても・・・」

リュカはまだうつむいたままだ。

ハルトはリュカを立ち直らせようと考え。

「その服かわいいね。似合ってるよ。」

「えっ」

リュカは顔を上げ、少し顔を赤くし聞いてきた。

「ほんと??」

ハルトの背は175cmでリュカより背が高いが、その顔で上目遣いはやめて欲しい・・・

今度はハルトが顔を赤くし、照れ隠しで歩き出した。

「行くぞ。」

「あ・・・まってよ。」

リュカはハルトの後を追いつけた。

学園都市を探索し、服屋、小物屋、アクセサリーを見て回り、お昼を食べた。

午後は、本屋や魔法具店を見て回った。

本屋でハルトは、リュカそっちのので、例の本『異世界への旅立ち 下巻』を探していた。

だが見つけることはできなかった・・・

本屋を出てから元気が無くなったハルトを見て、リュカは心配になった。

休憩しに近くのベンチに座り、リュカはハルトに聞いてみた。

「本屋を出た後、元気が無かったけど、どうしたの？」

「いや、ちよつとね・・・探していた本がなくて。」

「大切な本なの？」

「俺にとってはとても大切だ。」

ここまで落ち込むほどの本にリュカは興味をもった。

「なんていう本なの？」

「『異世界への旅立ち』って本なんだけど、俺にしか読めない文字で書いてある。」

「ハルトにしか読めないって、魔法がかかっているの？」

「そうみたいだ。見たことある？」

「そんな本は私のいた町にも無かったし、聞いたこと無いな・・・」

「そうか・・・」

ハルトはまた沈んでしまった。

「いつか見つかるよ。元気だして！！私も手伝うから！！」

「ごめんな・・・心配掛けて・・・昨日会ったばかりなのに・・・」

「私は昨日、ハルトに命を助けられたんだから。それぐらい手伝うよ。」

「ありがとう。もう大丈夫だよ。ごめん、時間をとらせて。」

「なら、もう少し見て回ろう！！」

リュカは笑顔で手を出した。

ハルトはその手を取り立ち上がった。

その後、また店を回りリュカの宿まで送った。

「今日はハルトと回れて楽しかったよ。」

「俺も楽しかったよ。元気付けられたし。」

ハルトはそう言うと、少し照れたように笑った。

そしておもむろに、ポケットから綺麗に包装された物も取り出し、リュカに渡した。

「これは?？」

「その時のお礼。俺からのプレゼント。」

「え．．．こんなのいいのに。」

リュカの顔には嬉しさと困惑が混ざっていた。

「受け取ってくれ。」

そういうとリュカの顔は笑顔になった。

「ありがとう。開けてみていい?」

「いいよ。」

包装をはずすと中から綺麗な髪飾りがでてきた。それを見たリュカは驚いた。

「これは!?!」

「昨日リュカがくれた宝石を、髪飾りに付けてもらったんだ。」

「でも、そんな時間あった？」

「リュカには悪いけど、俺は一足先に少し探し物をしていたんだ。といっても武器屋とプレゼントを探すだけだったけど。」

「あつ!!ずるい!!」

そう言つと、リュカは頬を膨らまし、怒った顔をした。

「ご、ごめんってば。」

ハルトが困つたように謝ると。

「いいよ、許してあげる。」

そう言つて、リュカは笑い出し、ハルトも続いて笑つた。

「明日は入学式だね。ハルトと同じクラスになれたらいいな。」

「それはわからないよ。明日になるまで。」

そう言つと、またリュカは膨れっ面をして。

「こういうときは、「俺も一緒のクラスになりたい。」って言うもんだよ。」

「そうなのか、ごめん。」

少し間が空き、また二人して笑った。

「俺も一緒のクラスになれば嬉しいよ。」

「もう遅いよ・・・」

ハルトはやさしく微笑み。

「大丈夫きつとなれるよ。」

「本当だね。きつとだからね。」

ハルトとリュカはまた約束を交わし、宿へと戻った。

異世界に飛ばされて - 魔法学園入学式 -

4月5日、今日はヴァンリス魔法学園の入学式である。

入学式ではクラス分けも行われる。

8時半に学園の講堂に集合だ。

俺は今日も6時に起き、魔法と剣の練習をし、風呂に入り朝食を食べた。

そして、今日から学園内にある寮が使えるので、荷物をまとめた。

「荷物は後で寮に運ぶとして、合格証明書と。後は．．．特に忘れ物は無いな。」

最後の点検をし、学園の紋章が刺繍してあるローブを羽織り、俺は学園に向かった。

宿から出ると、昨日とは打って変わって、学園のローブを着ている人が多い。

みんな学園の生徒のようだ。

俺も学園に向かって歩いた。

学園の門に着き、門番に合格証明書を見せ、学園の中に入った。

学園の建物はなんていうか．．．すごいとしか言えなかった。

校舎は東京駅に似ていた。

門から校舎まで長い道を歩いていると、後ろから声を掛けられた。振り返るとリュカがいた。

「おはようハルト。」

「おはよう、リュカ。」

お互い挨拶を交わし、二人で講堂に向かった。
講堂に入るとすでに結構な人数が集まっていた。

「席は決まっていないようだな。」

俺は周りを見てそう言った。

「なら隣同士で座ろうよ。」

リュカに誘われ一番端の席に、端からリュカ、俺の順で座った。
式が始まるまでリュカと話していると、また声を掛けられた。

「隣座っていいか??」

顔を見ると、赤い髪で短髪、ツンツンヘア、イケメンの男が立っていた。

俺は頷くと、男は座り自己紹介を始めた。

「俺の名前はバジル・オーリクだ、よろしくな。」

相手が名乗ってきたので、無視する訳にはいかなかった。

「俺はハルト・クガ、よろしく。」

「ハルトか、俺のことはバジルと呼んでくれ。ところで隣のかわいい子は知り合い? まだクラスも決まって無いのに、やけに親しく話してたけど。」

バジルというやつは、初対面なのに土足で踏み込んでくる。

俺はリュカに視線を送った。

「私の名前はリュカ・アルエ。ハルトには、2日前に盗賊に襲われていたところを助けてもらいました。」

俺とリュカの出会いを説明するとバジルは声を上げた。

「なに！！こんなかわいい子を助けただと！！何ておいしい役を！！俺も早く来るんだった・・・」

「たまたま通りかかったただだよ。それに盗賊も大したこと無かったし。」

俺が言うと、リュカは。

「そんなこと無いよ。ハルトは10人以上いた盗賊を一瞬で倒して私を助けてくれたんだから。」

バジルは俺に興味を持ったのか。

「10人か・・・ハルトは強いんだな。今度俺も見てみたいな。」

といい。

「だから、そんなじゃないって。ほとんど不意打ちだったんだから。ほら、そろそろ式が始まるよ。」

俺はその話をそらした。

式が始まり、この世界でも、学園長の言葉やお偉いさんの言葉が長々と話され退屈だった。

そして、新入生代表の言葉で、壇上に上がった女子生徒をみていたらバジルが口を開いた。

「おい見ろよ！シルヴィー・ディオールだ。」

「誰だそれ？」

俺は彼女の事は知らなかった。

「シルヴィー・ディオールを知らないのか！！彼女はヴァンリス王国の東側に広大な領地を持つ、ウォリス・ディオール公爵の娘、そして、ディオール家は魔法の才能が高いことで有名だ。その中でも特に、彼女はずば抜けた才能を持ち、幼少の頃から英才教育を受けている。この新入生の中では、Sクラス確定、首席間違いなしといわれている。」

「詳しいな・・・。」

「こんなの、この学園に来るやつなら誰でも知っている。知らない方がおかしい。」

「俺は田舎からきたからね。そのせいだよ。」

「彼女を知らないなんて、相当田舎なんだな。」

「ほつとけ。」

そんなやり取りをバジルしていると式も終わり、クラス分けが始まった。

新入生全員に銀色のガードが配られた。

「これなんだ？」

俺がリュカに聞くと。

「これは学生カードだよ。これを両手で挟んで、魔力を練ってマナを送り込むと、マナの質と魔力量でクラス分けがされるんだよ。クラスは上からS A B C D E Fだよ。」

「へ〜なるほど。」

「ハルトは送られてきた書類読まなかったの？」

「あ、ああ。実は魔法学園に応募したの俺の師匠なんだ。いつの間にか受かって、ぎりぎりの日に、今から出れば間に合うだろうって言われて出てきたから・・・。」

「そうだったの！！すごい師匠だね。」

俺とリュカが話しているとバジルが話してきた。

「早いとこクラス分け終わらせないか？3人一緒にやろうぜ。」

バジルの案に頷き、3人一緒にマナを送った。

すると、銀色のカードが光、文字が浮かんできた。

はじめにバジルが

「やった！！俺Sクラスだぜ！！」

続いてリュカが

「私もSクラス！！」

最後に残ったのが俺だが、少し俯くと・・・
リュカが心配そうに声を掛けてきた。

「ハ、ハルトはどうなの・・・？」

「お、俺は……………」

長いことためをつくつと、リュカはまさかハルト！！と言いたげな顔をして。

「俺もSクラスだよ。」

そう言うと、リュカは『ぽかん』という顔をして数秒後・・・

「ハルトのばか！！！！」

と大声を上げた。

結局3人ともSクラスとなった分けたが、この後リュカの機嫌をとるのに10分以上かった。

今日はクラス分けで終わりなので、この後どうするか悩んでいるとバジルが。

「せっかく、友達になれたんだ、さっそくみんなで、お祝いしようぜ！！」

ということ、近くの飲食店で飲み食いすることになり、夕方まで楽しんだ。

食事会も終わり、今日からは寮生活になるので、リュカと別れ（当たり前だが、男子寮と女子寮はべつである。）バジルと自分たちの部屋を探しに言った。

そしたら、寮は2人一部屋で、バジルと同じ部屋だった。

俺とバジルは改めて自己紹介をし、握手を交わした。

これから一緒に生活、勉強する仲間と。

1 学年 - 4 月 6 日 ? -

4 月 6 日、俺は 6 時に目を覚まし、ルームメイトのバジルを起こさないように部屋を出た。

目的は、日課の魔法と剣の練習をする場所を探すためである。

あまり目立ちたくないため、人目の少ない場所を探し、敷地内を歩いている。

「しかし、この学園は広い・・・」

いろいろつぶやきながら探していたが、いい場所が見つからない。30 分位歩き回り。

「今日は諦めるか・・・」

俺は寮へ戻ることにした。

寮に戻り、これからの練習はどうするか考えた。

まだこの学園にある施設がわからない・・・

学生が個人で使えるか・・・

人目につかない場所なのか・・・

「どうしようか・・・」

ふと時計を見たら 30 分たっていた。

「たしか 1 限は 8 時 30 分からだったな。歩いて少し汗もかいたしシャワーでも浴びるか。」

この学園は意外と設備が整っているのだ。

シャワーを浴び、ぬれた髪を風属性の魔法で乾かしたら7時30分。

「確か食堂がこの学園にはあるんだっただな。バジルでも起こしていいか。」

まだ二段ベットの上に寝ているバジルを起こし、俺達は食堂に行った。

食堂に着くと結構人がいた。

朝食は食堂でとる人が多いようだ。

俺とバジルは列に並んで料理を取り、空いている席に座った。

学園の料理はなかなか豪華だった。

朝食を食べ終わり、まだ授業には時間があつたのでバジルと話した。

「なあ、シルヴィ・ディオールは確実として、Sクラスにはどんなやつが来ると思う!？」

「俺が知るわけないだろ・・・シルヴィ・ディオールのことも知らなかったんだぞ。」

「それもそうか・・・あのシルヴィ・ディオールを知らなかったんだものな。」

こんな話をしていると声を掛けられた。

「わたくしがどうかしまして？」

声の主を見たらシルヴィー・ディオールだった・・・

不意に話していた本人が現れたことで、俺たちは驚いた。

入学式のときはあまりはつきり見ていなかったが、シルヴィー・ディオールは、顔は整い金色に輝く髪が腰まで伸び、蒼眼の綺麗な女性だった。

「な、なんにもないよ。俺たちはただ、Sクラスにはどんなやつが来るか話していただけた。それでシルヴィー・ディオールは来るだろうっていうこと。」

俺がそう答えると。

「そうですね。なら、あなたたちもSクラスなのですね。」

「そうだよ。」

「わたくしはシルヴィー・ディオール。Sクラスですわ。」

「ハルト・クガだ。こっちはルームメイトのバジル。」

俺が紹介すると、さっきまで固まっていたバジルが口を開いた。

「お、俺はバジル・オーリク、よろしく。」

「ハルトさんとバジルさんですわね。」

「呼び捨てでいいよ。」

俺がそう言つとバジルも頷いた。

「なら、わたくしの事はシルヴィーでかまいませんわ。」

「わかった。」

「あら、そろそろ授業の時間ですわ．．．もう少しお話ができればよかったですわ．．．」

「同じクラスだから話す機会はいくらでもあるよ。」

「そうですわね。これからお互いに良い関係になればうれしいわ。」

「俺もこれからよろしく。」

「よろしくですわ。それではまた教室で。」

そう言つとシルヴィーは先に教室へと歩いていった。

俺たちも教室へ向かうことにした。

「さて、俺たちも教室に行くぞ。」

俺が声を掛けるが、バジルはまだぼけーっとしていた。

「おい！！初日から遅刻はまずいだろ、早く行くぞ。」

2回目にしてようやくバジルが反応した。

「あ、ああ・・・って、何でハルトは平然と受け答えができる！？相手はあのシルヴィー・デイオールだぞ！！公爵嬢だぞ！！ちよつとはびくびくしろよ！！」

「そんなこと言われたって・・・クラスメイトだろ。」

「ただのクラスメイトじゃねーよ！！そこのやつとは違うんだぞ！！」

「公爵嬢だが知らないが、俺にはただのクラスメイトだよ。もういいだろ・・・遅刻するから先に行くぞ。」

「ちよ、ちよつ待てよ！！」

俺はわめくバジルを置いて先に教室に向かった。

正直、公爵が貴族の中では位が一番高いのは知っているが、元の世界ではなかったことなのでよくわからなかった。公爵嬢だろうがなんだろうが俺にはただのクラスメイトでしかなかった。

教室に着くと、すでにほとんどの席が埋まっていた。
席はあらかじめ決まっているようだ。
席を探しているとリュカが声を掛けてきた。

「おはようハルト。ハルトの席はここだよ。」

そう言うところリュカは自分の前の席を指した。

「おはようリュカ。俺の席はリュカの前か。」

「授業中に寝てたら起こしてあげる。」

リュカは微笑みながら言い、俺は意地悪そうに返事をした。

「大丈夫だよ。俺は真面目だから。リュカこそ寝るなよ。」

リュカは少し怒ったように言った。

「私は寝ないよ！」

俺は辺りを見回しバジルを探した。

バジルは俺たちと同じ列（窓側から2列目）の一番後ろだった。
シルヴィーは入り口側の前から4番目だった。

リュカと少し話していると、チャイムが鳴り先生らしき女性が入ってきた。

教壇の前に立ち生徒をみわたしゆったりと話し始めた。

「新入生の皆さん、入学おめでと〜sクラス担任のマリア・シャ

レットです。」

小さくゆったりした人だ。

背は150cmくらいで、腰までウェーブのかかった桃色の髪、目は大きく瞳は茶色、かわいらしい女性だった。

他の連中も少し困惑気味だった。

後ろからリュカが話しかけてきた。

「あの人がsクラスの担任なの??大丈夫なのかな??実力はあるのかな??」

「わからないよ。人を見た目だけで判断できない。魔力量は結構あるみたいけど・・・」

「ええ!!魔力量わかるの!??」

リュカは驚いていたが声を押し殺して聞いてきた。

「まあ大体だけだね。まだ練習中。他人にはらさないでくれよ。」

「わかった。今度私にも教えてね。」

「また今度な。」

俺たちが話していると・・・

「そこのお二人さん、今は私が話しているんですよ」

マリア先生に注意された。

俺とリュカは頭を下げた。

するとマリア先生は納得顔で言った。

「みんなは私が担任で大丈夫なのか心配しているんですね。」

話の内容が聞こえていたのか・・・？

「私はこう見えて、この学園のSクラスを首席で卒業したんですよ。」

この発言でクラスの連中から驚きの声が上がった。
俺も驚いていた。

「みんなの心配が解けたことで、今度はみんなの自己紹介をしてもらおうかな。最初はさっきお喋りしていた二人からで。」

マリア先生はそう言って、俺たちを指した。
俺とリュカは苦笑いした。

そして俺から自己紹介をすることになった。
席から立ち名前を言おうと思ったら・・・

「前に出てきてください。」

マリア先生にそういわれたので、俺は前に出た。

「俺の名前はハルト・クガ、よろしく。」

そっぴい席に戻ろうとすると・・・マリア先生に止められた。

「それだけですか・・・もう少ししないのですか・・・？」

俺はそっけなく返した。

「特に無いです。」

「困りましたね〜じゃあ先生から質問です。適性属性は何ですか〜??」

「師匠から他人に無闇に教えると言われてるので言えません。」

「大丈夫ですよ〜他の生徒にも答えてもらいますから〜それに〜これから魔法を勉強するにあたって必要なことですから〜教えてくださ〜い。」

俺は一つ抜かし、しぶしぶ顔で答えた。

「俺の適性属性は風と雷です。これでいいですか？」

「わかりました〜戻っていいですよ〜」

許可が出たので、俺は席に着いた。すれ違いにリュカが前に出た。

「私の名前はリュカ・アルエです。適性属性は風と氷です。よろしくお願いします。」

リュカの適性属性は風と氷か〜
師匠と一緒にだな。

そんなことを考えていると、次はバジルの番になっていた。

「俺はバジル・オーリク!!!適性属性は火と雷だ!!!よろしく!!!」

！
」

バジルはテンション高めの挨拶だった。
適性属性はバジルに合っていると思った。

そして自己紹介が進み、シルヴィーの番になった。
するとクラスがざわめいた。

そんな中、シルヴィーは悠然と自己紹介を始めた。

「わたくしの名前はシルヴィー・ディオール。適性属性は火と氷ですわ。」

淡々と自己紹介をして、席に戻っていった。

そして全員の自己紹介が終わったとき、チャイムがなり、1限目が終わった。

「これで1時間目は終わります。2時間目は学園について詳しく説明します。」

マリア先生はそう言って出て行った。

この学園は60分授業で休み時間は15分だ。

授業が終わり、リュカが話しかけてきた。

「マリア先生ってすごい人だったんだね。」

「そうだな。見た目で判断しちゃダメだっということが良くわかったな。」

「そうだねって、ハルト！！さっきの魔力を感じるってどういうこと！！！」

「落ち着けて．．．ここでは話せないよ．．．」

するとバジルが話しに入ってきた。

「ここで話せないような事ってどんなことだよ!」

興味津々といった感じた。

リュカは俺に目配せをしてきた。

俺はバジルになら教えてもいいかと思い頷いた。

リュカは小声で話した。

「ハルトが相手の魔力を感じて魔力量までわかるんだって。」

話を聞いたバジルは大声を出した。

「なに!!」

この声を聞きクラスの視線が集まった。

俺はため息をつきバジルに言った。

「周りから見られているだろ．．．あと、他のやつには言つなよ。」

バジルは声を小さくして聞いてきた。

「わかった。だけど本当なのか?? 普通は相手に魔力が有るか無いかぐらいしかわからないだろ。ハルトは魔力量もわかるのか??」

「大体だけだな．．．今は練習中だ。」

「すげーな！！俺にもできるのか？？」

「多分できると思うよ。」

「なら今度教えてくれ！！」

「わかったから・・・リュカと一緒に教えるよ。」

そう言うバジルはかなり喜んでいた。

それから、しばらく話しているとチャイムがなり2限が始まった。

マリア先生が教室に入ってきて話し始めた。

「それでは2時間目は学園について話します。」

マリア先生の話が始まったが長いのでまとめた。

学年は1年～3年

1年間は前期後期に別れている。

4月5日～8月15日 前期

10月1日～3月5日 後期

8月16日～9月30日 長期休業

12月20日～1月10日 年末休業

3月5日 卒業式

3月6日～4月4日 長期休業

通常授業は5日学校があり1日休み

学園の1日

1限 8：30 9：30

2 限 9 : 4 5 1 0 : 4 5
 3 限 1 1 : 0 0 1 2 : 0 0
 昼休み 1 2 : 0 0 1 3 : 0 0
 4 限 1 3 : 0 0 1 4 : 0 0
 5 限 1 4 : 1 5 1 5 : 1 5
 6 限 1 5 : 3 0 1 6 : 3 0

授業

魔法学、魔法歴史学、歴史学、魔物学、社会学、数学、実技がある。

魔法学：魔法の理論を学び、多くの魔法を覚える

魔法歴史学：魔法の歴史について学ぶ

歴史学：国の歴史について学ぶ

生物学：人、動物、魔物について学ぶ

社会学：国内外の情勢などについて学ぶ

数学：数学を学ぶ

実技：魔法学で学んだ魔法や武術の実戦

学園の施設

校舎、学園の森、闘技場、大講堂、小講堂、寮、図書館などがある。

卒業生は魔術師、宮廷魔術師、近衛騎士、騎士団、冒険者、学園の教師、研究者になった人がいる。

などなど、マリア先生は長々話した。

そしてチャイムがなりマリア先生は3限の予定を言った。

「3時間目は学園の施設を見学します。教室にいてくださいね」

そう言って出て行った。

マリア先生が出て行くと、バジルが俺とリュカの席に来て話し始めた。

その声はとても眠そうだった。

「いやゝ長い話だったな．．．少し寝ちまった．．．」

「確かに長かったな．．．俺も疲れた．．．」

「私も眠いゝ」

二人とも眠そうだ．．．

俺は早く施設見学をしたかった。

「次は施設見学か。図書館を早く見たいな。」

するとリュカが思い出したような顔をし、言った。

「そう言えばハルト、本を探していたんだよね。」

「この学園の図書館は世界で一番でかいって聞いたからね。」

「なんていう本だよ??」

バジルの質問にリュカが答えた。

「『異世界への旅立ち』っていう本だって。」

「聞いたこと無いんですけど、ここにならあるかもしれないな。俺も覚えておくよ。」

「見つけたらよろしくといいたいが、多分読めないよ。魔法がかかってるから。見慣れない字で書かれた本があつたら教えてくれ。」

「そんな本があるのか．．．？？まあ、わかった。見かけたら教えるよ。」

「ありがとう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1496z/>

異世界への旅立ち 上下巻

2011年12月24日02時52分発行